

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Whaling in the World and Recent Research Trends on Anthropological Studies of Whaling

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009428

世界の捕鯨と捕鯨に関する最近の研究動向

岸上 伸啓

(人間文化研究機構・国立民族学博物館)

1 はじめに

大海原を悠然と回遊する巨大生物というクジラのイメージが人口に膾炙^{かいしや}している。たしかに全長30メートル、体重140トンを超すシロナガスクジラは地球上で最大の生物であり、クジラのイメージに合致する。しかし、生物学的にクジラというとき、それは1.5メートルほどのネズミイルカも含んでいる。すなわち、クジラとは、ザトウクジラやホッキョククジラのような大型クジラのみならず、シロイルカやオキゴンドウなどのイルカ類を含む、哺乳類のクジラ目に属する海棲動物の総称である。クジラ（鯨類）は大きさも習性も多様であり、現在、約85種類が同定されている。

クジラは、ハクジラとヒゲクジラに大別できる。ハクジラは歯を持ち、魚類を主食としている一方、ヒゲクジラはエサである小魚やプランクトンをヒゲで濾して食べる。代表的なハクジラには、大型のマッコウクジラやツチクジラ、小・中型のイシイルカ、マイルカ、ハンドウイルカ、スジイルカ、ハナゴンドウ、オキゴンドウ、シャチ、スナメリ、イッカク、シロイルカなどがいる。ハクジラの中ではヨウスコウカワイルカやアマゾンカワイルカは開発の影響で絶滅の危機に瀕している。ヒゲクジラには大型のものが多く、代表的なものは、シロナガスクジラ、ホッキョククジラ、セミクジラ、ナガスクジラ、コククジラ、イワシクジラ、ミンククジラ、ザトウクジラなどである。

人類が海洋に進出したのは、約5万年前のことであると考えられている。人類は近海を泳ぐクジラを見たり、崇めたり、漂着したクジラを資源として利用したりすることはあっただろうが、積極的に捕獲し始めたのは数千年前である。沿岸とはいえども海上で大型の動物を捕獲するためには、生態環境的な条件に加えて、船や狩猟具のような物質文化と捕獲のための技術、集団猟を行うための社会組織などを必要とした。興味深いことに世界各地で積極的な捕鯨が行われるようになったのは、地球の温暖化期の10世紀前後である。生態的な条件と技術・社会的な条件などが整ったこの時期に、多くの人間が捕鯨を積極的に行い、クジラを食料や燃料、道具等を製作するための資源として利用し始めた。このため世界各地で捕鯨に深く関連する社会組織や思想・世界観、狩猟道具と技術、料理、交易などが生み出され、地域や時代ごとに多様な生活様式を形成するようになった。ここでは、捕鯨とそれに関連する生き方を広義の捕鯨文化と呼ぶことにしたい。

クジラの過剰捕獲によってその資源量が減少したこと、石油のような鯨油に代わる燃

料資源が出現したことによって捕鯨は衰退し、人類とクジラの関係も変容した。現在でも限られた世界各地の先住民や地域住民のみが捕鯨を行い、食料やその他の資源として利用しているが、それ以外の人びとはクジラを自然環境のシンボルとして保護や保全の対象と見なすようになってきた。現在では、ホエール・ウォッチングなど非致死的な利用が主流になりつつある。人類とクジラの関係を経史的な流れとして大別すると、利用しなかった時代、致死資源利用の時代、保護・非致死利用の時代となる(岸上 2019)。

ここでは、人類によるクジラの致死利用である捕鯨に焦点をあて、世界各地の捕鯨の歴史と現状を紹介するとともに、最近の研究動向を紹介する¹⁾。

2 捕鯨の歴史

2.1 世界の捕鯨の歴史

人類とクジラの関係の歴史は数千年にも及ぶ。人類が海岸に漂着したクジラを利用したことは容易に推測できるが、約5千年前には小型のクジラ類を捕獲し、利用してきたことが石川県の縄文時代の真脇遺跡の発掘調査などによって判明している(平口 1989; 2003; 2009)。同様に、ノルウェーのレイクネス遺跡や韓国蔚山近郊のバングデ遺跡などでも捕鯨が数千年前に行われていたと推定されている。

紀元後9世紀ごろになると北欧のバイキングの人びと(ノース人)がクジラを利用していたと言われている。そしてベーリング海峡地域の先住民や南欧のバスク人がそれぞれホッキョククジラやセミクジラなど大型クジラを意図的に捕獲しはじめたのは、10世紀前後だと考えられている。

沿岸近くから始まったバスク人の捕鯨は、13世紀ごろには大西洋に漁場を拡大し、それから約300年間、バスク捕鯨の時代が続いた(ブルールクス 2010)。そして大航海時代になると産業資源としてクジラを本格的に捕獲するようになった。

クジラの脂肪からとれる鯨油は、欧米人にとってランプの燃料や石鹸の原材料として貴重な資源であった。バスク人やバイキングの人びとは鯨肉を食用にしたが、ほかのヨーロッパ人が食用とすることはほとんどなかった(森田 1994: 398-400)。中世の西南ヨーロッパではオリーブ油が主流であったが、ローマ帝国の崩壊でオリーブの産地が非ヨーロッパ人によって支配されたため、鯨油がその代用品として流通するようになった。また、ヒゲクジラ類のヒゲは、鞭やばね、コルセットの部品の原材料として利用された。

1540年代には新大陸のニューファンドランド沖やラブラドル沖、セント・ローレンス湾で、イギリスやオランダ、バスクから来た捕鯨船がセミクジラやホッキョククジラを捕獲した。1610年ごろから1660年ごろまでノルウェーに近い北極圏にあるスピッツベルゲンでイギリスやオランダによって捕鯨が始まり、同地域における北極圏捕鯨は18世紀半ばまで行われた。また16世紀から18世紀にかけて捕鯨船の大型化にともない漁場は大

西洋全域へと拡大していった。

17世紀から18世紀にかけてオランダが世界最大の捕鯨国となった。18世紀初頭にグリーンランド西岸とバフィン島の間にあるデービス海峡で商業捕鯨が開始されると、19世紀まで続いた。17世紀から19世紀は、セミクジラやマッコウクジラを対象とする帆船式大型遠洋捕鯨の時代であり、イギリスやオランダ、アメリカが競合した。18世紀以降にヤンキー・ホエラーズとして名を馳せたアメリカは、19世紀にはいると世界最大の捕鯨国になった。アメリカにおいて17世紀から19世紀にかけて捕鯨業は主要産業のひとつであった。

19世紀には欧米の捕鯨は太平洋にまで拡大し、セミクジラに加え、マッコウクジラが捕獲するようになった。クジラ資源が豊かなジャパングラウンドをアメリカ人捕鯨者が発見した。アメリカの捕鯨船はその捕鯨場の近くに、食料や飲料水の補給地を必要とした。このことが、アメリカが日本に開国をせまる要因の一つになった。19世紀後半には高速捕鯨船に捕鯨砲を装備したノルウェー式捕鯨が各国の捕鯨者によって採用された。

1848年には、新たな捕鯨場がベーリング海を越え、アラスカ沿岸やカナダ西部極北地域沿岸の北極海へと広がり、ホッキョククジラが捕獲対象となった。この地域の捕鯨は、クジラ資源の枯渇化やクジラヒゲの価格の低下のために、1914年ごろに終焉を迎えた。

20世紀にはいると捕鯨場は、太平洋からさらに南氷洋やインド洋へと広がっていった。そして1930年代には日本も加わり南氷洋におけるクジラの乱獲の時代に突入した。これまでに紹介したように商業捕鯨は、ある場所に資源がなくなると別の場所に資源を求めて移動するという資源略奪型であった。このような捕鯨が数世紀にわたって続いたため、クジラの頭数が減少していった。そこで、捕鯨者はクジラ資源の枯渇化を懸念し、無制限の捕獲から科学的に資源を管理しながら捕獲するという立場に変化した。

1946年に国際捕鯨取締条約 (International Convention for the Regulation of Whaling, 略称 ICRW) が締結され、それに基づいて1948年には国際捕鯨委員会 (International Whaling Commission, 略称 IWC) が設立された。この時期から資源を管理しながら捕獲を実施するようになった。しかし、オリンピック方式と呼ばれる競争的な捕鯨はザトウクジラやシロナガスクジラ、ナガスクジラ、イワシクジラ、マッコウクジラなどの鯨種の資源を激減させていった。また、鯨油の入手をおもな目的としていたアメリカやオランダ、イギリスなどかつての捕鯨国は、燃料として石油の普及によって鯨油生産の採算がとれなくなると、1960年代末までに捕鯨から手を引いた。

捕鯨やクジラに関して大転換が見られたのは、1972年にストックホルムで開催された国連人間環境会議である。アメリカの代表は「クジラを救えずに環境は守れない」と発言し、商業捕鯨の10年間のモラトリアム (一時的な捕獲の停止) を提案し、同会議では合意が得られた。たが、同年に開催された IWC 総会では捕鯨国から反対意見があり、採択されなかった (大隅 2003)。

しかし、ちょうど10年後の1982年にはIWC 総会はモラトリアムに合意し、1990年までに13種の大型クジラの資源量を調査し、1975年に導入された持続可能な捕鯨のための管理方式を検討することになった。この決定は、世界各地の捕鯨産業に大きな影響を与えた。日本では、南極海における母船式捕鯨を1987年3月に、日本沿岸における大型鯨類の捕獲を1988年3月に一時停止した。2018年現在の日本では、日本沿岸や南氷洋、北西太平洋における大型鯨類を対象とした調査捕鯨とIWCの規制外にある小型鯨類の捕獲を行っている。

1990年にIWCの科学委員会は、コククジラとミンククジラの資源量を適切に管理しながら捕鯨をすれば問題ないことを報告し、改訂管理方式を提案したが、IWC 総会は科学的な情報の不確実性を理由に捕鯨の再開を承認しなかった。同様な決定が1992年、1993年と続き、この頃から商業捕鯨の再開問題は科学的な問題解決では決着がつかない、きわめて政治的な問題となった（大曲 2002）。IWCの加盟国は、クジラ資源の利用のための管理の実施を主張する捕鯨支持国、商業捕鯨そのものを中止すべきだという反捕鯨国、中立国へと分かれ、以降、捕鯨問題混迷の時代に突入した。

商業捕鯨モラトリアムに関する国際捕鯨取締条約の附表修正に留保を表明したノルウェーは、一時、商業捕鯨を停止し、IWCが承認した調査捕鯨に従事していたが、1993年からミンククジラの商業捕鯨を再開している。そして同様に商業捕鯨モラトリアムの附表修正に留保を表明していたアイスランドは、1992年にIWCを脱退し、北大西洋海産哺乳類委員会（North Atlantic Marine Mammal Commission, 以下、NAMMCOと略称）を設立し、捕鯨を継続した。しかし、2002年にIWCに復帰し、商業捕鯨を一時停止したが、2006年からミンククジラやナガスクジラの商業捕鯨を再開している。日本は、IWC総会で一時停止が決まった商業捕鯨は行っていないが²⁾、2018年まで北西太平洋と南極海、日本近海においてIWC 総会が承認している調査捕鯨を実施してきた。

IWC加盟国においては反捕鯨国が多数派であるが、捕鯨支持国も4分の1以上を占めている。国際捕鯨取締条約附表の修正には4分の3以上の同意が必要であるため、両者とも拒否権は行使できるが、4分の3以上の賛成を獲得できないため、国際捕鯨取締条約の変更や捕鯨の再開はできない状態が続いてきた。

グリーンピースなどの環境NGOは、1960年代よりすべての商業捕鯨を禁止させるための反捕鯨キャンペーンを展開し、世界の世論に影響を及ぼしている。現在、クジラは、世界各地で環境保護のシンボルとなり、多くの人びとにとってホエール・ウォッチングの対象ではあっても、食料資源や産業資源ではなく、守るべき対象となりつつある。一方、捕鯨を行ってきたイヌビアットやチュクチらの先住民は捕鯨の継続を、日本やノルウェー、アイスランドは食料資源を入手するための大型クジラの商業捕鯨の再開を主張している。

2018年12月29日に日本政府はIWCから脱退し、2019年夏より日本の排他的経済水域

でのミンククジラ漁などの商業捕鯨を再開することを決定した。この決定によって日本は、北西太平洋海域や南極海での調査捕鯨ができなくなる。

世界の商業捕鯨の歴史的展開とその衰退は、日本などの商業捕鯨や世界各地の先住民の捕鯨に大きな影響を及ぼしてきた。このような歴史のもとに現代の捕鯨や捕鯨問題が存在しているのである。この理解のもとに、次に世界各国の捕鯨の現状をみていく。

3 世界各地における捕鯨の現状

ノルウェーやアイスランドなど一部の国を除くと、大型クジラの商業捕鯨を行っている国はないが、世界各地でさまざまな形で捕鯨が実施されている。

捕鯨の分類にはいくつかのやり方がある（たとえば、Reeves and Smith 2003）。ここでは便宜的にIWCの管轄下の捕鯨とそうでない捕鯨の2つのカテゴリーに分けて記述する。すでに紹介したようにIWCが管理する鯨種は大型の13種類（現在の分類では17種類）であり、基本的にそれらの商業捕鯨は一時的に停止された状態にある。しかし、IWCがすべての捕鯨を禁止しているわけではなく、モラトリアムに反対し留保の立場をとる国の捕鯨、国際捕鯨取締条約で認められている調査捕鯨、そして先住民生存捕鯨（Aboriginal Subsistence Whaling）は実施されている。なお、IWCに加盟していない国々は、原則として大型クジラを捕獲することができる。また、IWCが管理している以外の鯨種については現在でも捕獲することができる。

3.1 IWCの管轄下で実施されている捕鯨

IWCのもとで実施されているのは、留保による商業捕鯨と調査捕鯨、先住民生存捕鯨の3種類である（表1）。これらは、現在、6年に1度、IWC総会で可否や捕獲頭数などが決定されている。

表1 IWCの管轄下で実施されている大型クジラの捕鯨（2018年7月1日現在）

捕鯨の種類	事例
IWCの附表修正に対する留保に基づく商業捕鯨	ノルウェーのミンククジラ捕獲、アイスランドのミンククジラやナガスクジラの捕獲
科学的調査捕鯨	日本の南極海でのクロミンククジラの捕獲、北太平洋と日本沿岸でのミンククジラとイワシクジラの捕獲
先住民生存捕鯨	ロシア・チュコト半島沿岸のチュクチのクククジラの捕獲とユビートのホッキョククジラの捕獲、アラスカのイヌピアットとユビートのホッキョククジラの捕獲、アメリカ・ワシントン州のマカーのクククジラの捕獲（中断中）、グリーンランドのナガスクジラ、ザトウクジラ、ミンククジラ、ホッキョククジラの捕獲、カリブ海のベクウェイ島地域のザトウクジラの捕獲

先住民生存捕鯨としてIWCが認可しているのは、アラスカ先住民イヌピアットとユピート、ロシアのチュクチとユピート、アメリカ先住民マカー、グリーンランドのカラーヒット（グリーンランド・イヌイット）およびカリブ海のベクウェイ島地域の住民による捕鯨である。なお、マカーは、国内法である海洋哺乳類保護法の適用を除外してもらうために必要なアメリカ政府による環境影響評価の結論が出ていないうえに、動物保護・環境NGOによる捕鯨再開に反対する訴訟が続いているために、現在は捕鯨を中断している（浜口 2013）。

IWCの特別許可による調査捕鯨は、かつてアメリカやソ連（現在のロシア）、ノルウェー、アイスランドも行っていたが、2018年時点では日本のみが実施している。日本では一般財団法人日本鯨類研究所が中心となって南極海と北西太平洋、日本沿岸において調査捕鯨を実施し、クジラの年齢と食性、栄養状態、汚染物質の蓄積量、DNAによる系統群などを調べている。調査の副産物であるクジラの肉や脂皮などは、規則に則り、調査後、国内で販売されている。すでに言及したが、日本政府は2018年末にIWCから脱退し、商業捕鯨の再開を決定したので、2019年からは調査捕鯨を取りやめることになる。

ノルウェー（IWC加盟国）は、1982年にIWC総会で採択された商業捕鯨モラトリアムに異議申し立てを行い、採択留保の立場を表明し、1993年にミンククジラの商業捕鯨を再開した。ノルウェー政府は現在、NAMMCOの勧告を受けつつ独自の資源管理制度のもとで、ミンククジラを捕獲している。すでに述べたように、IWCに再加入したアイスランドも2006年から商業捕鯨を再開している。

3.2 IWCの管轄下でない捕鯨

IWCに加盟していない国で大型鯨類を捕獲している国には、カナダやインドネシアがある。カナダ極北地域におけるイヌイットによるホッキョククジラ猟、インドネシア・レンバタ島のマッコウクジラ漁などが実施されている（岸上 2013a; Kishigami 2016; 江上・小島 2012, 2014; Egami and Kojima 2013）。さらに、IWCの管轄外にある小型鯨類は、現在でも世界各地で捕獲されている。たとえば、カナダの極北地域に住むイヌイットはシロイルカやイッカクを捕獲しているし、グリーンランドのカラーヒット（イヌイット）はそれらに加え、ゴンドウクジラを捕獲している。アラスカやチュコト半島の沿岸に住む先住民は、シロイルカを捕獲している。デンマーク領フェロー島やカリブ海諸国ではゴンドウクジラなどを捕獲している。これら以外にソロモン諸島やカリブ海の諸島などではイルカ漁を行っている。

日本では、IWCの管轄外であるイルカ漁を沿岸で小型捕鯨として実施している。小型捕鯨とは50ミリ以下の捕鯨砲を積載した50トン未満の小型捕鯨船による鯨類捕獲である。北海道の網走と函館、宮城県の鮎川、千葉県の和田浦、和歌山県の太地に基地を持つ捕鯨船が、ツチクジラやマゴンドウ、タツパナガ、ハナゴンドウを捕獲している。この捕

鯨を行うためには、農林水産大臣からの許可が必要である。

北海道や青森県、岩手県、宮城県、千葉県、和歌山県、沖縄県ではイシイルカやスジイルカ、ハナゴンドウ（2008年以降はオキゴンドウに代わる）、マゴンドウ、バンドウイルカなどを対象としたイルカ漁が実施されている（大隅 2003: 148-154）。その漁法には、追い込み漁と突きん棒漁、石弓漁があり、これらの漁を実施するためには当該地域の都道府県知事の許可が必要である。追い込み漁とは、船で湾内に群れを追い込んで、網で囲い込む漁であり、現在では和歌山県太地のみで行われている。突きん棒漁は、小型漁船から手鉈を投げてイルカを捕獲する漁であり、北海道や青森県、岩手県、宮城県、千葉県で行われている。沖縄県では、ゴム動力を利用して捕鯨鉈を発射させてイルカを捕獲する石弓漁が行われている。なお、行政上の分類では、石弓漁は突きん棒漁の中に入っている。

かつては静岡県の伊東市富戸漁港などの漁師も追い込み漁を行っていたが、国内外からのイルカ漁批判を受けて同漁をやめ、現在ではイルカ・ウォッチング業や別の漁業へと転換している。また、東北地域のイルカ漁や小型捕鯨は、2011年3月11日に発生した東日本大震災によって甚大な被害を受け、継続が危ぶまれたが、復興しつつある（Holm 2019）。

クジラは定置網などで混獲されることがある。日本の沿岸ではミンククジラなどが混獲されることがしばしばあり、その肉や脂皮は漁協を通して流通し、食料品として利用されている。韓国南部地域でも混獲されたクジラは食べられている（李 2012）。

4 反捕鯨運動の出現と拡大

1970年代になると、環境保護団体や動物保護団体が商業捕鯨に反対する社会運動を組織し、展開するようになった。現在でも反捕鯨活動を展開している代表的な団体は、FoE (Friends of the Earth, 旧称「地球の友」)、グリーンピース、世界自然保護基金（略称 WWF）、国際動物福祉基金（略称 IFAW）、グリーンピースを追放されたポール・ワトソンが創設したシー・シェパード（略称）、「環境調査エージェンシー」（略称 EIA）、クジラ・イルカ保全協会（略称 WDC）、米国人道協会（略称 HSUS）、英国王立動物虐待防止協会（略称 RSPCA）などである。

グリーンピースは、北太平洋での旧ソ連の捕鯨を阻止しようと直接的な行動をとったことで有名になった。FoE は、グリーンピースに先立ち1971年から捕鯨問題に取り組んでいた。WWF の本部はすべての商業捕鯨に反対する立場をとっているが、日本とノルウェーの WWF 支部はたとえ商業捕鯨であっても生息数が多いクジラの持続可能な利用であれば、捕獲を容認する立場を表明している。IFAW は、反捕鯨の科学者に対し資金的な研究支援を行った。シー・シェパードは、アイスランドで捕鯨船の破壊を行ったり、

日本の太地のイルカ漁や南極海での調査捕鯨、アメリカ先住民のマカーやフェロー諸島での捕鯨を物理的に妨害する活動を繰り返したりと、過激な反捕鯨運動を行ってきた。EIAは、デンマーク領フェロー諸島のゴンドウクジラ漁に反対する運動を行ってきた。これらの団体は、テレビ番組やネットなどマスメディアを活用して彼らの主張を喧伝し、一般市民に対して徐々に影響力を強めるとともに、政治的なロビー活動を展開し、各国政府の捕鯨・反捕鯨政策にも影響を及ぼすようになった。多くの反捕鯨団体は先住民による伝統的な捕鯨を容認しているが、シー・シェパードのようにすべての捕鯨に反対しているような団体もある。

日本ではグリーンピースやクジラ&イルカ・アクション・ネットワークらは商業捕鯨に反対しているが、伝統的な鯨食を完全に否定しているわけではなく、持続可能な鯨類利用は容認する傾向にある。

アメリカやEU諸国、南米の国々、オーストラリア、ニュージーランドなどの政府は、政策的に商業捕鯨に反対の立場を明確にしている。このため、IWC総会において商業捕鯨の再開に必要な4分の3以上の賛成票を得ることはきわめて難しい状況にある。

5 捕鯨に関する最近の研究動向

筆者は、別稿において2010年ごろまでに出版された国内外の捕鯨に関する研究の主な動向について紹介した(岸上 2011b, 2012b; Savelle and Kishigami 2013)ので、ここでは以前のレビューで取り上げなかった研究や2010年以降の研究を中心に紹介し、その動向について検討する。

5.1 研究プロジェクト

世界的に見ても捕鯨に関する研究は、文化人類学など人文学・社会科学の分野ではあまり盛んでない一方、生物学や複合科学、考古学においては鯨類の研究が盛んに行われているといえる。ここでは文化人類学などの人文学・社会科学領域に限定して、研究動向を概観したい。

文化人類学分野では、捕鯨文化に関する共同研究は、国立民族学博物館のプロジェクトを除けば、皆無に近い。同館の岸上伸啓は、共同研究「捕鯨文化の実践人類学的研究」(2008年度~2011年度)および共同研究「捕鯨と環境倫理」(2016年度~現在)を実施するとともに、2015年度から2018年度にかけて科学研究費補助金(A)「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究」(課題番号JP15H02617)によって共同研究者が世界各地で現地調査を行なった。その成果の一部は国際シンポジウムや学会での口頭報告および論文集として公開してきた(池谷・岸上・佐々木・戸田 2018: 339-342; 岸上編 2012; Kishigami, Hamaguchi, and Savelle 2013)。これらのプロジェクトでは、北アメリカやグ

グリーンランド、ベクウェイ島、日本、アイスランド、ノルウェー、フェロー諸島、インドネシアのラマレラなど世界各地における捕鯨文化の歴史と現状を取り上げ、比較するとともに、現在の捕鯨文化の担い手が直面している諸問題について検討を続けてきた。現在は、反捕鯨運動や環境倫理、動物倫理との関連から世界の捕鯨文化を調査し、比較検討を試みている。

5.2 先住民生存捕鯨研究

先住民生存捕鯨の歴史と現状については、浜口 (2012a; 2013; 2016b) と岩崎 (2011) が俯瞰的についてまとめている。浜口 (2016b) はIWCの先住民生存捕鯨をめぐる国際的な政治について説明した後、ベクウェイ島の捕鯨の現状と問題について詳述している。岩崎 (2011) は、先住民が捕鯨を行う上での現金の重要性を指摘し、生存捕鯨の中に現金による鯨産物の売買取引を構成要素のひとつとして取り入れることの必要性を主張している。

岸上は2010年代に入っても引き続き、アラスカ州バロー村のイヌピアットによるホッキョクジラ猟および獲物の分配、関連する祝宴や祭りについて研究し、それらの現代社会における社会・文化・政治的な重要性や、捕鯨と関連する諸活動がモースのいう「社会的全体的現象」である点を指摘した (岸上 2010, 2011a, 2012a, 2012c, 2012d, 2013b, 2014a, 2014b, 2014c, 2015, 2018a, 2018b; Kishigami 2013a, 2013c, 2013d)。また、気候変動がイヌピアットの捕鯨に与えた諸影響の研究 (Kishigami 2010) やアラスカのイヌピアットとカナダ・イヌイットの現代の捕鯨に関する比較研究 (岸上 2016a) も行っている。さらに、捕鯨を動物福祉との関連から検討した成果を発表している (岸上 2017)。

チュコト半島のチュクチやユピートの捕鯨³⁾に関しては、2000年頃以降、ほとんど現地調査が行われていないが、映像化がなされており、YouTubeで“I am Hunter: traditional whaling in Russia’s Chukotka Peninsula”などを見ることができる。また、チュクチの海獣狩猟に関する本が英語で出版された (Bogoslovskaya, Slugin, Zagrebin, and Krupnik eds. 2016)。その本の中で、ボゴスロフスカヤらは、コククジラ猟とホッキョクジラ猟、シロイルカ猟について報告している (Bogoslovskaya, Krupnik, Slugin, and Chukaev 2016)。池谷は、チュクチのコククジラ猟と鯨肉の利用について現地調査の成果を報告している (Ikeya 2013)。

グリーンランドにおける捕鯨については、高橋美野梨と本多俊和が現地調査を行なっている。高橋らは、グリーンランドの捕鯨の現状について報告している (岸上 2016b; 高橋 2016)。また、浜口はグリーンランドのザトウクジラ猟がIWCによって承認された経緯を報告し、分析している (浜口 2016a)。

カリブ海のベクウェイ島の捕鯨については、浜口尚が精力的に調査をすすめ、その成果を論文 (浜口 2012b; Hamaguchi 2013b) や1冊の本 (浜口 2016b) にまとめ、出版し

た。携帯電話の普及が、捕鯨者間の連絡方法を変え、新たな捕鯨の方法が始まったことを報告している（浜口 2011）。また、浜口は捕鯨活動とホエール・ウォッチングの葛藤についても報告している。ホエール・ウォッチングはザトウクジラが島周辺に回遊してくる特定の季節にしか観光ビジネスとして成立しないという問題点や捕鯨の衰退は地域文化の衰退につながるという可能性を指摘している（浜口 2015; Hamaguchi 2015）。

米国ワシントン州のマカーに関する研究はコーテ（Coté 2010）によるもの以外はほとんど出版されていないが、浜口尚はマカーによる捕鯨の近代史と現状についてまとめている（浜口 2013）。また、マカーのククジラ鯨の復活の過程をドキュメンタリー的に描き出した読み物が刊行されている（Sullivan 2000）。

5.3 大型クジラの商業捕鯨と調査捕鯨

ノルウェーの捕鯨や捕鯨文化については、石川創や赤嶺淳が現地調査を実施している。石川は、現在のノルウェーの小型沿岸捕鯨について報告している（石川 2016a; 2016b; 2016c）。アイスランドの捕鯨については、浜口尚が現地調査を開始し、捕鯨の現状やホエール・ウォッチングとの葛藤について報告している（浜口 2017a; 2017b）。

2014年3月31日にオーストラリア・ニュージーランドと日本で争っていた、南極海における日本の調査捕鯨の合法性をめぐる判決が国際司法裁判所で言いわたされた。同捕鯨はIWCが設定した調査捕鯨の要件を満たしていないという理由で日本が敗訴した（森下 2015）。児矢野（2014）は同裁判の意義を国際行政法の視点から考察している。石井・真田（2015）は、この捕鯨裁判をドキュメンタリー的に再現した上で、この裁判での争点や日本社会の問題点を分析し、解決策を提案した。彼らは、国会の正式な機関として科学技術評価局を設立し、新調査捕鯨計画に関する批判的評価を実施した結果を国会に報告した上で、審議すべきだという意見を述べている。

ホルム（Holm）は、日本がIWCを脱退することが決まってから、沿岸捕鯨を行っている和歌山県の太地、千葉県のと田浦、宮城県の鮎川、北海道の釧路を訪問し、捕鯨関係者らの商業捕鯨の再開に関する反応を調査している（Holm 2019）。全般的に商業捕鯨の再開についての反応は、沿岸捕鯨の装備が老朽化していること、十分な資本がないこと、捕鯨者は約40人しかおらず高齢化が進んでいること、日本政府の支援があるかどうか不明なこと、同政府が厳しい捕獲頭数制限を課す可能性があることなどから、芳しくない。ホルムは、新たな商業捕鯨が、日本全体における鯨肉などの需要を増大させるかなどを予想することができないと指摘している（Holm 2019）。

5.4 地域捕鯨について

IWCの管轄下にはない北アメリカ地域の先住民による捕鯨については、カナダ・イヌイットのホッキョククジラ鯨、アラスカやカナダ、グリーンランドにおけるシロイルカ

鯨やイッカク鯨がある。フレシェットらは、2008年のヌナヴィク・イヌイットによるホッキョククジラ鯨の復活を記録している (Fréchette ed. 2013)。また、ログランとウーステンは、カナダにおける現在のイヌイットの捕鯨と伝統的な世界観との関連と連続性について報告している (Laugrand and Oosten 2013)。岸上は、1990年代後半以降に復活したカナダ・イヌイットのホッキョククジラ鯨の復活の経緯や現状について報告している (岸上 2013a, 2018b; Kishigami 2016)。また、ホッキョククジラ鯨の現代のイヌイット文化における重要性を指摘するイヌイット自身による見解も発表されている (Mackay 2014)。

現在は捕鯨を中断中のカナダ・バンクーバー島の先住民ヌーチャヌヒ (Nuu-Chah-Nulth) については、アリマとフーパーによる民族誌が復刻された (Arima and Hoover 2011)。岸上 (2014d) は同捕鯨の歴史と復興運動、現状、先住権との関係について報告している。アラン・マクミランは、考古学および民族学の調査などに基づき、バンクーバー島西部沿岸地域では積極的な捕鯨が2500年~3000年前にはすでに行われており、クジラよりもザトウクジラがより多く捕獲されていたことを指摘した。そしてチーフは、捕鯨の成功とその成果の分配によってより高い威信を獲得することができた。マクミランは、この地域での捕鯨の発達の原動力は、チーフの間でより高い地位の獲得を競い合ったことであると主張している (McMillan 2015)。

北アメリカ北西海岸先住民のヌーチャヌヒやディティダート、マカーはかつて捕鯨を行い、捕鯨が首長 (チーフ) の威信に係わる社会文化的に重要な活動であることが知られている。それらの社会では、岩絵や儀礼具などにシャチなどが彫られたり、描かれたりしていることが多い。マクミランは、民族誌や口頭伝承、考古学的な遺物を吟味し、オオカミとシャチは、相互に変身できる存在であり、捕鯨上手であることを指摘する。また、空想上の鳥サンダーバードも凄腕の捕鯨上手である。ヌーチャヌヒらがサンダーバード、オオカミ、シャチなどを儀礼道具や岩絵に好んで表象するのは、捕鯨や捕鯨チーフと深く関係しているからだと指摘する (McMillan 2019)。

現在のワシントン州の北西端地域にある捕鯨民マカーの遺跡に関する単行本が刊行されている (Kirk 2015)。考古学者のロージーらは、考古学者は北西海岸地域のヌーチャヌヒとマカー以外の捕鯨についてはほとんど無視し、他集団の捕鯨については研究してこなかったと批判し、オレゴン州沿岸部の遺物分析から捕鯨が行われていたことを指摘した (Losey and Yang 2007)。この研究からヒントを得たクラパートンはエスノヒストリー研究によって米国ワシントン州ピュージェット湾のセイリッシュがシャチやイルカなどを捕獲していたと主張している (Clapperton 2018)。

デイヴィッド・リーや大村敬一らはカナダ極北地域のボンド・インレットやクガールクにおけるイッカク鯨に関して報告している (Lee and Wenzel 2017; 大村 2016)。また、イッカクに関するイヌイットの持つ知識についても報告されている (Nweecia et al. 2017)。

Pelle Tejsner (2014) は、グリーンランド北西部の村ケッケタルスアックにおいてシロイルカとイッカクに課せられた1年あたりのクオータの配分が専門ハンターと非専門ハンターとの間の紛争の原因となっていることを報告し、検討している。彼は、同論文において捕鯨の規制は鯨種の管理のみならず、捕鯨者と彼らの家族の管理であること、そして捕鯨における社会的な持続可能性と環境的な持続可能性への懸念と微妙な形で結びついていることを記述し、検討している。岸上はカナダ・イヌイットのシロイルカ猟を事例として生業論を展開している (Kishigami 2013b)。

インドネシア・レンバタ島ラメラ村におけるマッコウクジラ漁については、江上と小島が調査を継続し (江上・小島 2012; Egami and Kojima 2013), 同村における捕鯨と漁業の現状について2010年から2013年の漁獲統計を分析し、不安定要素の多い捕鯨を効率よく実施していることや共同体が維持され、伝統が優先されているという社会の持続的側面ともに、動力船網漁が導入されたことによる地元社会の変化について報告している (江上・小島 2014)。石川梵 (2011) は、ラメラ村における道路交通網の発展や反捕鯨の国際的な環境団体が捕鯨から網漁業への転換を試みていることを紹介し、現地で起こっている社会変化について報告している。

デンマーク領フェロー諸島のゴンドウクジラ漁については、河島基弘が現地調査を実施し、同捕鯨の歴史と現状、現地における反捕鯨運動の展開、鯨肉の環境汚染問題等について報告している (河島 2017)。セント・ヴィンセント島のコビレゴンドウ捕鯨については、ラッセル・フィールディングが調査をしている (Fielding 2014)。同氏は、フェロー諸島の捕鯨やクジラの水銀汚染について調査を行なうとともに (Fielding 2013b; Fielding, Davis, and Singleton 2015; Fielding and Evans 2014; Singleton and Fielding 2017), アラスカの捕鯨やセント・ヴィンセント島の捕鯨と比較研究を行っている (Fielding 2013a; 2017; 2018)。

渡部はロシア・カムチャツカ本島における先住民のシロイルカ猟を北東アジア地域の海獣狩猟の中に位置づけた研究を発表している (渡部 2012; Watanabe 2013)。

日本の捕鯨文化や鯨食、イルカ漁についてもいくつかの研究が報告されている。中園 (2012) は、日本における捕鯨について狩猟方法に着目しながら歴史的变化を概観している。岩崎と野本 (岩崎・野本 2012; Iwasaki-Goodman and Nomoto 2013) は日本のアイヌの捕鯨とクジラの利用方法や日本の東北地方や北海道などで発展を見た小型沿岸捕鯨について、小島 (2012) は千葉県和田浦の小型沿岸捕鯨の現状と課題について報告している。中村羊一郎は、日本各地で実施されていたイルカの追い込み漁の実態とそれらの歴史的变化、イルカ漁を行う村の村落組織、人間とイルカの関わり方について詳細な事例を提示し、分析している。その上で、中村は、クジラやイルカを含む全生物を絶滅からどのように守るか、さらに食料資源としてどのように管理すべきかを考えることが必要だと説いている (中村 2017: 254)。和歌山県太地町のイルカ追い込み漁を検討した

応用倫理学者の浅野幸治は、イルカ漁の是非を国民が十分な情報を得た上で熟議する必要がある、そのためにはイルカなど海生哺乳類の管轄を水産庁から環境省に移すことを主張している。なお、彼自身は野生動物を保護するのが基本原則であり、残酷なイルカ追い込み漁は止めるべきであると考えている（浅野 2016）。日本における鯨肉食については雑誌『食生活』が特集を組んでいる（月刊「食生活」編集部 2012）。

赤嶺は日本において鯨肉が希少価値を持つに至った鯨食文化の歴史の変遷を紹介し、戦後の鯨食の国民食化の要因として鯨肉が魚肉ソーセージの材料として使用されたことと学校給食で鯨肉が提供されたことを指摘している（赤嶺 2012; Akamine 2013）。さらに赤嶺（2017）は、クジラを捕った人、販売や加工した人、調理した人ら6人の個人史と鯨食の同時代史をとりまとめ、捕鯨を通じて日本社会の変容過程と複合性を明らかにしようと試みている。

丹野と濱崎は、2008年に首都圏で収集した560人分のデータを利用して統計分析を行い、現代の日本人の鯨食普及の促進要因や阻害要因、鯨食に対する男女差や年齢差を検証している（丹野・濱崎 2012; Tanno and Hamazaki 2013）。遠藤は、日本の鯨肉流通の変化と今後の課題を詳細なデータを基に分析している（遠藤 2012; Endo 2013）。

現在、韓国では大型鯨類の捕獲は行われていないが、南部の蔚山地域では混獲により入手したクジラの肉を食べることが行われている。李善愛は、韓国南部地域の捕鯨の歴史と鯨肉の流通について紹介した上で、現在の蔚山地域ではクジラ祭りなどを利用して地域の活性化を試みていることを報告している（李 2012）。また、同地域における鯨料理について紹介している（Ii 2013）。

5.5 その他の捕鯨関連研究

欧米社会ではクジラを神聖化し、環境保護運動や動物保護運動が行われている（Kalland 1993a, 1993b; 森田 1994; Peace 2010）。河島（2011; 2012）、Kawashima（2013）や石川（2011）は、なぜクジラが神聖視されるのかという問題や国際環境NGOらによる反捕鯨運動について分析している。石川（2012）は、反捕鯨運動との関連で捕鯨と動物福祉の問題を取り上げ、動物福祉問題は捕鯨を否定する要因とはならないと指摘している。野村康は、日本における反捕鯨運動が日本固有の政治文化・政治環境によってどのように制約されているかを、フレーミング論の視点から分析している。そして海外の反捕鯨活動家の過激な戦略が国内の反捕鯨NGO団体の信頼性を損ねたことや、日本の国民としてのアイデンティティと捕鯨とが結びついていること、言説を通して十分な共感を得られなかったことが、日本において反捕鯨運動が盛り上がりえない要因になっていると指摘している（野村 2016: 86）。高橋（2018）は、水産資源の管理と保護の視点から捕鯨問題を検討している。

近年は、ヨーロッパ諸国や中南米諸国、ニュージーランド、オーストラリアの各国政

府がクジラの保護や反捕鯨を国家の政策として打ち出している。森下やグッドマンは、商業捕鯨モラトリアムのはらむ矛盾を紹介し、検討している（森下 2012; Goodman 2013; Morishita 2013）。ヒーズル（Heazle 2013）は、捕鯨問題を日本とオーストラリアとの外交関係の関連から考察を加えている。前川（2017）は、オーストラリアの反捕鯨思想について政治家の発言に注目しながら分析し、捕鯨の保護はオーストラリア人の自然観、理想とする国家像、アイデンティティと深く関係していることを指摘している。ホルツマンは、鯨肉の消費について人類学の文化概念を反捕鯨活動家らが利用して、いかに先住民の捕鯨と鯨食は承認し、日本人の捕鯨と鯨食を批判しているかを分析している（Holtzman 2017）。

捕鯨に代わる非致死的なクジラ利用としてホエール・ウォッチングが注目されている（Hoyt 2007; O'Connor et al. 2009; WDC 2013）。必ずしも文化人類学分野ではないが、ホエール・ウォッチングに関する研究が多数、行われるようになった（浜口 2015, 2017a; Hamaguchi 2015; 岸上 2018c; Peace 2005）。興味深いのは、生物学者を中心にホエール・ウォッチングのクジラの生態や移動に及ぼす悪影響についても検討されている点である（たとえば、Arias 2018; New et al. 2015; Parsons 2012; Senigaglia 2016; Sullivan and Torress 2018）。

もうひとつの大きな動向は、現地の人々ともに実施された文理融合的調査による捕鯨に関する研究の増加である。特に、アラスカ地域の先住民捕鯨と地球温暖化、自然現象と関係を解明する興味深い研究が発表されており、捕鯨の継続という実践の面でも重要な成果である（たとえば、Ashjian et al. 2010）。

上記以外にも文化人類学的研究に関連するカナダ極北地域やアラスカ地域、日本列島の捕鯨文化についての考古学的研究が公刊されている（たとえば、山浦 2012; Jensen 2012; Savelle 2010; Savelle and Vadnais 2011）。また、スーザン・レボ（Lebo 2013）は、ハワイ先住民が欧米の商業捕鯨にどのように関わっていたかをハワイ先住民の視点から検討した歴史研究を出版している。

先住民による捕鯨の法的に検討した研究（Hossain 2008）などが注目に値する。なお、これらについては、筆者の専門外なので、本稿ではこれ以上は深くは触れない。

6 小結

本稿では、世界各地の捕鯨の現状をIWCの管轄下にあるものとそうでないものの2つに大別して紹介した。大型鯨類の商業捕獲は現在も一時停止中であるが、世界各地ではさまざまな捕鯨やイルカ漁が行われていることを示した。その上で、2010年ごろ以降の研究動向について紹介した。

この10年間に日本人研究者がノルウェーやアイスランド、デンマーク領フェロー諸島、

グリーンランドの捕鯨に関する現地調査を開始したという新たな展開が見られた。また、捕鯨やクジラに関する文化人類学研究は世界的に見ると研究者が限られており、それほど盛んではないことが分かったが、気候変動とクジラの生態、捕鯨との関係に関する文理融合的な研究などいくつか新たな研究が出現したことも判明した。さらに別稿において提起した研究課題（岸上 2011b: 451; 2012c）に関して言えば、クジラの非致命的利用であるホエール・ウォッチングの研究や捕鯨に関わる動物福祉・倫理の研究、先住民生存捕鯨における現金の位置づけに関する研究が行われている。しかしこれらのテーマはいまだに十分に検討されているとは言い難い。これらは今後の課題である。

最後に捕鯨の文化人類学的研究の重要性を指摘しておきたい。捕鯨の歴史的变化を見るとさまざまな理由でクジラと人間の関係が大きく変わってきたことが分かる（岸上 2019）。従って、人間と生物との歴史的变化を理解し、解明する上で、グローバル化や環境、歴史を考慮に入れつつ、各地の現地の視点から現象を理解しようと試みる文化人類学的捕鯨研究は重要な役割を果たすと考える。今後、捕鯨研究がさらに発展することを期待したい。

7 本書の構成について

本書は「はじめに」で紹介した科学研究費補助金・基盤研究（A）（海外学術）「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究—伝統継承と反捕鯨運動の相克」（課題番号：JP15H02617，研究代表者：岸上伸啓）の成果の一部を取りまとめたものである。編者として内容と流れをできる限り統一しようと試みたが、各研究分担者がもっとも成果の上昇した部分を報告したため、現状ではなく、歴史や変化を取り扱う論文もあり、本書の構造が分かりにくくなっていることを認めざるを得ない。最後に本書の構成について述べておきたい。

本書の総論部分にあたる箇所、編者は現在の捕鯨をIWCとIWC以外に大別し、紹介する枠組みを提示した。文化人類学的研究の強みは、現在行われている捕鯨活動を現場の視点から理解し、記述し、分析することである。いっぽう、この視点に固執するとグローバルな政治経済的な動きや歴史や変化に関する理解が弱くなる。そのため本書は文化人類学的な強みと弱みを併せ持つ。弱点を補うために現地調査を行なった文化人類学者はグローバルな動きや歴史性にも注意を払った。また、国際政治学の視点からEUの捕鯨をめぐる政治動態を検討した論文を所収することにした。

導入部に相当する本稿では、世界各地の捕鯨の歴史と現状を紹介した後、近年の捕鯨研究の動向について概略し、21世紀の捕鯨と捕鯨研究の動向の全体像を示した。この動向に照らせば、本書に所収されている論文は、これまでほとんど研究されてこなかったノルウェーとアイスランド、デンマーク領グリーンランドやフェロー諸島の捕鯨、アラ

スカとカナダ極北地域の先住民による捕鯨の現状に関する諸論文、日本の小型沿岸捕鯨の歴史と現状を包括的に扱った論文、ベトナム沿岸地域や韓国南部におけるクジラをめぐる信仰や捕鯨文化に関する論文、EUにおける環境政策に関する論文など最新の研究成果である点を強調しておきたい。

本書は、IWCの捕鯨とそれ以外の捕鯨という立場から各論は次のような4部構成の配置にすることにした。第1部は、IWCの枠内で実施されている商業捕鯨に関連する研究成果である。

アイスランドとノルウェーはIWCのモラトリアムに留保の態度を表明し、現在もIWCの枠組みの中で商業捕鯨を実施している。浜口論文ではアイスランド捕鯨の現状と課題、赤嶺論文ではノルウェーと日本の鯨食の違いについて南極海での捕鯨の歴史的展開との関連で論じる。

第2部は、IWCのもとで実施されている先住民（生存）捕鯨とそれ以外の先住民捕鯨に焦点を合わせる。岸上論文は、北アメリカ先住民によるIWCの管轄下の捕鯨とIWCの管轄外で実施されている捕鯨を比較する。グリーンランドでは現在、IWCの先住民生存捕鯨として実施される以外に、IWCの管轄外のシロイルカ猟などが実施されている。本多は、グリーンランドにおける捕鯨の歴史的変化をたどった上で、現在の捕鯨の特徴を把握しようと試みている。

第3部では、IWCの管轄外にある鯨類の沿岸捕鯨について報告し、考察を加える。石川論文は、日本で明治期以降に発展してきたIWCの管轄下にはない小型沿岸捕鯨の歴史と現状を俯瞰的に把握する。一方、河島論文は、デンマーク領フェロー諸島の小型鯨類の捕獲について報告し、和歌山県太地町で行われている小型沿岸捕鯨と比較考察する。

第4部は、ヨーロッパにおけるクジラをめぐる政治とアジアのクジラ信仰の歴史を紹介し、検討する。現在の欧州連合（EU）に属する諸国の間には共通の環境政策が作り出され、それを遵守することが要求されている。そのひとつが、商業捕鯨に対する強力な反捕鯨政策である。この政策は、IWCにおいて間接的にグリーンランドの先住民生存捕鯨にも影響を及ぼしている。高橋論文は、EUにおける捕鯨政策について考察を加えている。捕鯨は実施していないアジアの国々の中に、クジラを信仰の対象とする文化が残っている。そのひとつがベトナム沿岸地域における鯨廟の存在である。李論文では、ベトナム沿岸部での鯨廟やそれに関連する祭祀活動と韓国南部での鯨信仰の歴史的変遷を比較し、クジラが人を護る存在から人に守られる存在に変化してきたことを論じている。

注

- 1) 本稿は、筆者がこれまでに発表した原稿（岸上 2011b; 2012b）を改稿し、新たな研究動向に関

する情報を付け加えたものである。捕鯨の歴史やクジラと人間の関係についてはさまざまな研究が存在している。たとえば、秋道 (1994; 2012), 大隅 (2003) や岸上編 (2012), 森田 (1994), 山下 (2004), Savelle and Kishigami (2013) などを参照されたい。本稿に対し園田学園女子大学短期大学部の浜口尚氏と国立民族学博物館外来研究員の中村真里絵氏からコメントを頂戴し、改稿した。また、査読者の方から建設的なご意見を頂いた。記して感謝する次第である。

- 2) 日本は当初モトリアムに対し異議申し立てし、商業捕鯨を継続する意思表示を行ったが、日本が商業捕鯨を続ければ、米国の排他的経済水域であるアラスカ近海での漁業を認めないとする米国政府からの政治的圧力によってモトリアムを受け入れることになった。
- 3) チュコト半島沿岸地域の先住民による捕鯨については、Krupnik (1987; 1993a; 1993b) をお読みいただきたい。

参考文献

赤嶺淳

- 2012 「食文化継承の不可視性—希少価値化時代の鯨食文化」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 207-224, 東京：成山堂。
- 2017 『鯨を生きる—鯨人の個人史・鯨食の同時代史』東京：吉川弘文館。

Akamine, J.

- 2013 Intangible Food Heritage: Dynamics of Whale Meat Foodways in an Age of Whale Meat Rarity. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 213-225. Osaka: National Museum of Ethnology.

秋道智彌

- 1994 『クジラとヒトの民族誌』東京：東京大学出版会。
- 2012 「世界の捕鯨文化—人類とクジラの関わりを再考する」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 31-43, 東京：成山堂。

Arias, M. et al.

- 2018 Impact of Whale-Watching on Southern Right Whale (*Eubalaena australis*) in Patagonia: Assessing Effects from its Beginnings in the Context of Population Growth. *Tourism Management Perspectives* 22: 1-9.

Arima, E. and A. Hoover

- 2011 *The Whaling People of the West Coast of Vancouver Island and Cape Flattery*. Victoria, Canada: Royal BC Museum.

浅野幸治

- 2016 「和歌山県太地町のイルカ追い込み漁問題」『医療・生命と倫理・社会』13: 15-31。

Ashjian, C. J. et al.

- 2010 Climate Variability, Oceanography, Bowhead Whale Distribution, and Inupiat Subsistence Whaling near Barrow, Alaska. *Arctic* 63 (2): 179-194.

Bogoslovskaya, L., I. Krupnik, I. Slugin, and R. Chukaev

- 2016 Whale Hunting. In L. Bogoslovskaya, I. Slugin, I. Zagrebin, and I. Krupnik (eds.) *Marine Hunting Culture of Chukotka: Traditions and Modern Practices*, pp. 212-224. Anchorage:

- National Park Service.
- Bogoslovskaya, L., I. Slugin, I. Zagrebin, and I. Krupnik (eds.)
 2016 *Marine Hunting Culture of Chukotka: Traditions and Modern Practices*. Anchorage: National Park Service.
- Clapperton, J.
 2018 Whale Tales: (Re)Discovering Whales and Whaling in Puget Sound Salish Culture and History. A Paper Read at the Conference “Across Cultures and Species: New Histories of Pacific Whaling”, Held at Hawai’i Imin International Conference Center, University of Hawai’i – Manoa, Honolulu, USA, 30, June, 2018.
- Coté, C.
 2010 *Spirits of Our Whaling Ancestors: Revitalizing Makah and Nuu-chah-nulth Traditions*. Seattle and London: University of Washington Press.
- 江上幹幸・小島曠太郎
 2012 「インドネシア・ラマレラの伝統捕鯨文化と社会変化—1994～2010年の捕鯨記録を中心に」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 102-121, 東京：成山堂。
 2014 「インドネシア, ラマレラ捕鯨と漁の現在—2010年～2013年漁獲統計と分析」『沖縄国際大学 総合学術研究紀要』17(2): 1-74。
- Egami, T. and K. Kojima
 2013 Traditional Whaling Culture and Social Change in Lamalera, Indonesia: An Analysis of the Catch Record of Whaling 1994-2010. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 155-176. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 遠藤愛子
 2012 「変容する鯨類資源の利用実態—日本の鯨肉流通について」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 245-263, 東京：成山堂。
- Endo, A.
 2013 A Review of Changes in the Use of Whale Resources over Time in Japan, with a Specific Example of the Hand-harpoon Fishery of Nago, Okinawa Prefecture. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 227-250. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Fielding, R.
 2013a Whaling Futures: A Survey of Faroese and Vincentian Youth on the Topic of Artisanal Whaling. *Society and Natural Resources* 26(7): 810-826.
 2013b Coastal Geomorphology and Culture in the Spatiality of Whaling in the Faroe Islands. *Area* 45(1): 88-97.
 2014 The Liminal Coastline in the Life of a Whale: Transition, Identity, and Food-Production in the Eastern Caribbean. *Geoforum* 54: 10-16.
 2017 Indigeneity and Ecology in Alaskan and Faroese Whaling. In K. Maier and S. J. Ray (eds.) *Critical Norths: Space, Nature, Theory*, pp. 87-102. Fairbanks: University of Alaska Press.
 2018 *The Wake of the Whale: Hunter Societies in the Caribbean and North Atlantic*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Fielding, R., J. E. Davis, Jr., and B. E. Singleton

- 2015 Mutual Aid, Environmental Policy, and the Regulation of Faroese Pilot Whaling. *Human Geography* 8(3): 37-48.
- Fielding, R. and D. Evans
- 2014 Mercury in Caribbean Dolphins (*Stenella longirostris* and *Stenella frontalis*) Caught for Human Consumption off St. Vincent, West Indies. *Marine Pollution Bulletin* 89(1-2): 30-34.
- Fréchette, R. (ed.)
- 2013 *Arvik!: In Pursuit of the Bowhead Whale*. Westmount, QC: Nunavik Publications.
- 月刊「食生活」編集部編
- 2012 「特集 鯨肉 くじら」『食生活』vol. 106.
- Goodman, D.
- 2013 Japanese Whaling and International Politics. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 325-335. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 浜口尚
- 2011 「モバイル時代の鯨捕り—カリブ海、ベクウェイ島の事例より」松本博之編『海洋環境保全の文化人類学』（国立民族学博物館調査報告 97）pp. 225-236, 大阪：国立民族学博物館。
- 2012a 「先住民生存捕鯨再考」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 45-63, 東京：成山堂。
- 2012b 「カリブ海・ベクウェイ島における先住民生存捕鯨」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 83-101, 東京：成山堂。
- 2013 「サンダーバードは再びマカーの地に舞い降りるか？—マカー捕鯨の歴史、現状および課題」『園田学園女子大学論文集』47: 155-176。
- 2015 「ホエール・ウォッチング—小さな捕鯨の島・ベクウェイ島の厄介な問題」『園田学園女子大学論文集』49: 55-65。
- 2016a 「『国際捕鯨取締条約』附表の修正からみたグリーンランド捕鯨—特にザトウクジラ捕鯨を中心に」『園田学園女子大学論文集』50: 29-57。
- 2016b 『先住民生存捕鯨の文化人類学的研究—国際捕鯨委員会の議論とカリブ海ベクウェイ島の事例を中心として』東京：岩田書店。
- 2017a 「アイスランドにおけるホエール・ウォッチングをめぐる一考察」『日本セトロジー研究』27: 1-7。
- 2017b 「アイスランド捕鯨—歴史、現況および課題」『園田学園女子大学論文集』51: 119-140。
- Hamaguchi, H.
- 2013a Aboriginal Subsistence Whaling Revisited. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 81-99. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2013b Aboriginal Subsistence Whaling in Bequia, St. Vincent and the Grenadines. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 137-154. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2015 Whale Watching: Trouble on the Small Whaling Island of Bequia. *Japanese Journal of Cultural Anthropology* 16: 59-67.

- Heazle, M.
- 2013 Unleashing the Beast: Whaling in the Contemporary Australia-Japan Relationship. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 287-303. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 平口哲夫
- 1989 「縄文時代のイルカ捕獲活動」『石川考古学研究会々誌』32: 19-38。
- 2003 「先史日本における鯨類の利用と捕獲—積極的な鯨類捕獲の始まりについて」日本鯨類研究所編『いまに生きる日本捕鯨の伝統とその源流』pp. 29-40, 東京: 日本鯨類研究所。
- 2009 「縄文時代の捕鯨」『ピオストーリー』11: 36-42。
- Holm, F.
- 2019 After Withdrawal from the IWC: The Future of Japanese Whaling. *The Asia-Pacific Journal* 17 (issue 4, number 4): 1-16. <https://apjif.org/2019/04/Holm.html> (accessed March 20, 2019)
- Holtzman, J.
- 2017 On Whale: Conundrums of Culture and Cetaceans as Local Meat. *Ethnos* 82(2): 277-297.
- Hossain, K.
- 2008 Hunting by Indigenous Peoples of Charismatic Mega-Fauna: Does Human Rights Approach Challenge the Way Hunting by Indigenous Peoples is Regulated? *International Community Law Review* 10: 295-318.
- Hoyt, E.
- 2007 A Blueprint for Dolphin and Whale Watching Development. Washington DC: Humane Society International.
- 李善愛
- 2012 「韓国の捕鯨文化—蔚山地域を中心に」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 264-281, 東京: 成山堂。
- li, S.
- 2013 Whale Food Culture in Korea: A Case Study in Ulsan Jangsaengpo. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 267-284. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Ikeya, K.
- 2013 Whale Hunting and Use among the Chukchi in Northeastern Siberia. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 121-136. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 池谷和信・岸上伸啓・佐々木史郎・戸田美佳子
- 2018 「最近の狩猟採集民研究の動向—第11回国際狩猟採集社会会議 (CHAGS11) に出席して」『国立民族学博物館研究報告』42(3): 321-372。
- 石井敦・真田康弘
- 2015 『クジラコンプレックス 捕鯨裁判の勝者はだれか』東京: 東京書籍。
- 石川梵
- 2011 『鯨人』(集英社新書) 東京: 集英社。
- 石川創
- 2011 『クジラは海の資源か神獣か』東京: NHK 出版。

- 2012 「捕鯨と動物倫理—動物愛護団体の批判に関する考察」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 317-335, 東京：成山堂。
- 2016a 「現代ノルウェーの捕鯨（1）」『鯨研通信』469: 22-29。
- 2016b 「現代ノルウェーの捕鯨（2）—日本との技術比較と鯨肉消費拡大の努力」『鯨研通信』471: 16-27。
- 2016c 「現代ノルウェーの捕鯨（3）—監視制度と鯨肉流通, そして鯨を捕る人々」『鯨研通信』472: 5-16。
- 岩崎まさみ
- 2011 「先住民による捕鯨活動」松本博之編『海洋環境保全の文化人類学』（国立民族学博物館調査報告 97）pp. 197-224, 大阪：国立民族学博物館。
- 岩崎まさみ・野本正博
- 2012 「日本における北の海の捕鯨」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 172-186, 東京：成山堂。
- Iwasaki-Goodman, M. and M. Nomoto
- 2013 Whaling in the Northern Seas off Japan. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 197-212. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Jensen, A. M.
- 2012 The Material Culture of Inupiat Whaling: An Ethnographic and Ethnohistorical Perspectives. *Arctic Anthropology* 49(2): 143-161.
- Kalland, A.
- 1993a Management by Totemization: Whale Symbolism and the Anti-Whaling Campaign. *Arctic* 46(2): 124-133.
- 1993b Whale Politics and Green Legitimacy: A Critique of the Anti-Whaling Campaign. *Anthropology Today* 9(6): 3-7.
- 河島基弘
- 2011 『聖なる海獣 なぜ鯨が西洋で特別扱いされるのか』京都：ナカニシヤ出版。
- 2012 「『法』の裁きを下すメディア時代の自警団？—シー・シェパードの反捕鯨キャンペーンの一考察」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 302-316, 東京：成山堂。
- 2017 「危機に瀕するデンマーク領フェロー諸島のゴンドウクジラ猟」『群馬大学社会情報学部研究論集』24: 15-31。
- Kawashima, M.
- 2013 Law-Enforcing Vigilantes in the Media Era?: An Investigation of Sea Shepherd's Anti-Whaling Campaign. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 305-324. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Kirk, R.
- 2015 *Ozette: Excavating a Makah Whaling Village*. London and Seattle: University of Washington Press.
- 岸上伸啓
- 2010 「北アメリカ極北先住民の食文化と社会変化—カナダ・イヌイトとアラスカのイヌピアットを中心に」『食文化研究』6: 39-44。

- 2011a 「米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの祝宴アプガウティについて」『人文論究』80: 97-110。
- 2011b 「捕鯨に関する文化人類学的研究における最近の動向について」『国立民族学博物館研究報告』35(3): 399-470。
- 2012a 「米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨グループについて — その運営と社会構成を中心に」『人文論究』81: 1-12。
- 2012b 「総論 — 捕鯨に関する文化人類学的研究について」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 1-30, 東京: 成山堂書店。
- 2012c 「アメリカ・アラスカにおける先住民生存捕鯨について」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 64-82, 東京: 成山堂書店。
- 2012d 「米国アラスカ州バロー村のイヌピアットによるホッキョククジラ肉の分配と流通について」『国立民族学博物館研究報告』36(2): 147-179。
- 2012e 「おわりに」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 337-339, 東京: 成山堂。
- 2013a 「カナダ・イヌイットのホッキョククジラ猟と先住権」『カナダ研究年報』33: 1-16。
- 2013b 「米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨祭ナルカタックについて — 祝宴における共食と鯨肉の分配を中心に」『国立民族学博物館研究報告』37(3): 393-419。
- 2014a 『クジラとともに生きる — アラスカ先住民の現在』京都: 臨川書店。
- 2014b 「アラスカの捕鯨民イヌピアットの真夏の祭典ナルカタック」高倉浩樹・山口未花子編『食と儀礼をめぐる地球の旅 — 先住民文化からみたシベリアとアメリカ』pp. 91-120, 仙台: 東北大学出版会。
- 2014c 「アラスカ北西地域におけるイヌピアットの食料の安全保障問題」『人文論究』83: 75-83。
- 2014d 「カナダにおける北西海岸先住民ヌーチャムスルの捕鯨と先住権」『北海道立北方民族博物館研究紀要』23: 23-34。
- 2015 「アラスカ・イヌピアット社会における使者祭りについて」『人文論究』84: 51-62。
- 2016a 「北アメリカの現代先住民捕鯨に関する比較研究 — アラスカのイヌピアットとカナダ・イヌイットのホッキョククジラ猟の比較」『人文論究』85: 63-75。
- 2016b 「グリーンランドとアイスランドの捕鯨」小澤実・中丸禎子・高橋美野梨編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章』pp. 233-238, 東京: 明石書店。
- 2017 「捕鯨と動物福祉」『人文論究』86: 71-81。
- 2018a 「アラスカ・イヌピアット社会におけるホッキョククジラ漁をめぐる宗教実践と社会変化」『社会分析』45: 19-35。
- 2018b 「ネオリベラリズムとカナダ・イヌイットの社会変化」関根康正編『ストリート人類学 — 方法と理論の実践的展開』pp. 415-431, 東京: 風響社。
- 2018c 「現代の鯨類利用に関する文化人類学的研究 — カナダ北西海岸地域のホエール・ウォッチングを中心に」『人文論究』87: 49-60。
- 2019 「人間とクジラの関係の歴史的变化に関する一考察 — アラスカ先住民イヌピアットとホッキョククジラを中心に」『人文論究』88: 57-66。
- Kishigami, N.
- 2010 Climate Change, Oil and Gas Development, and Inupiat Whaling in Northwest Alaska. *Études/Inuit/Studies* 34(1): 91-107.
- 2013a Aboriginal Subsistence Whaling in Barrow, Alaska. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84),

- pp. 101-120. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2013b What Is a Subsistence Activity?: With a Special Focus on Beluga Whale Hunt by Inuit in Arctic Canada. 『人文論究』 82: 79-90.
- 2013c On Sharing of Bowhead Whale Meat and Maktak in an Inupiat Community of Barrow, Alaska, USA. 『北海道立北方民族博物館研究紀要』 22: 1-19.
- 2013d (Research Report) Sharing and Distribution of Whale Meat and Other Edible Whale Parts by the Inupiat Whalers in Barrow, Alaska, USA. Osaka: Kishigami's Office, National Museum of Ethnology.
- 2016 Revival of Inuit Bowhead Hunts in Arctic Canada. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 16: 43-58.
- 岸上伸啓編
- 2012 『捕鯨の文化人類学』 東京：成山堂。
- Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.)
- 2013 *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology.
- 小島孝夫
- 2012 「千葉県和田浦の小型捕鯨業の現状と課題—鯨食文化の継承をめぐる—」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』 pp. 187-206, 東京：成山堂。
- 尾矢野マリ
- 2014 「国際行政法の観点からみた捕鯨判決の意義（捕鯨判決と調査捕鯨の行方）」『国際問題』 636: 43-58。
- Krupnik, I.
- 1987 Bowhead vs. Gray Whale in Chukotka Aboriginal Whaling. *Arctic* 40(1): 16-32.
- 1993a *Arctic Adaptations: Native Whalers and Reindeer Herders of Northern Eurasia*. Hanover, NH and London: University Press of New England.
- 1993b Prehistoric Eskimo Whaling in the Arctic: Slaughter of Calves or Fortuitous Ecology? *Arctic Anthropology* 30(1): 1-12.
- Laugrand, F. B. and J. G. Oosten
- 2013 “We’re Back with Our Ancestors”: Inuit Bowhead Whaling in the Canadian Eastern Arctic. *Anthropos* 108: 431-443.
- Lebo, S. A.
- 2013 A Hawaiian Perspective on Whaling in the North Pacific. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 51-78. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Lee, D. S. and G. W. Wenzel
- 2017 Inuit and Narwhals. In W. W. Fitzhugh and M. T. Nweeia (eds.) *Narwhal: Revealing an Arctic Legend*, pp. 105-120. Washington DC: IPI Press & Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution.
- Losey, R. J. and D. Y. Yang
- 2007 Opportunistic Whale Hunting on the Sothern Northwest Coast: Ancient DNA, Artifact, and Ethnographic Evidence. *American Antiquity* 72(4): 657-676.

- Mackay, T.
 2014 Spirit Whale: Bowhead Whaling Feeds Arctic Communities and Sustains Inuit Community. *Inuktitut* 114: 18-27.
- McMillan, A. D.
 2015 Whales and Whalers in Nuu-chah-nulth Archaeology. *BC Studies* 187: 229-291.
 2019 Non-human Whalers in Nuu-chah-nulth Art and Ritual: Reappraising Orca in Archaeological Context. *Cambridge Archaeological Journal*. (doi:10.1017/S0959774318000549)
- 前川真裕子
 2017 「オーストラリアの反捕鯨思想と人々の考える『理想的な』オーストラリア」『国立民族学博物館研究報告』42(1): 71-118.
- 森下丈二
 2012 「商業捕鯨モラトリアムの真実」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 283-301, 東京: 成山堂。
 2015 「南極海鯨類捕獲調査と国際司法裁判所 (ICJ) 判決について」『日本水産学会誌』81(1): 147-152.
- Morishita, J.
 2013 The Truth about the Commercial Whaling Moratorium. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 337-353. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 森田勝昭
 1994 『鯨と捕鯨の文化史』名古屋: 名古屋大学出版会。
- 中村羊一郎
 2017 『イルカと日本人—追い込み漁の歴史と民俗』東京: 吉川弘文館。
- 中園成生
 2012 「日本における捕鯨の歴史的概要—漁法を中心に」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 154-171, 東京: 成山堂。
- New, L. et al.
 2015 The Modelling and Assessment of Whale-Watching Impacts. *Ocean and Coastal Management* 115: 10-16.
- 野村康
 2016 「日本における反捕鯨団体の比較政治学的考察—ノルウェーとの対比を通じて」『人間環境学研究』14(1): 75-89.
- Nweeia, M. T. et al.
 2017 Inuit Contributions to Narwhal Knowledge. In W. W. Fitzhugh and M. T. Nweeia (eds.) *Narwhal: Revealing an Arctic Legend*, pp. 123-131. Washington DC: IPI Press & Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution.
- O'Connor, S. et al.
 2009 *Whale Watching Worldwide: Tourism Numbers, Expenditures and Expanding Economic Benefits, a Special Report from the International Fund for Animal Welfare*. Yarmouth, MA: Economists at Large.
- 大曲佳世
 2002 「鯨類資源の利用と管理をめぐる国際的対立」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する』

る人類学的研究』(国立民族学博物館調査報告 46) pp. 419-452, 大阪: 国立民族学博物館。

大村敬一

2016 「生存の条件 カナダ・イヌイトの生業システムの秘密」『アークティック・サークル』101: 4-9。

大隅清治

2003 『クジラと日本人』(岩波新書) 東京: 岩波書店。

Parsons, E. C. M.

2012 The Negative Impacts of Whale-Watching. *Journal of Marine Biology* Vol. 2012. Article ID 807294, 9 pages. (doi:10.1155/2012/807294)

Peace, A.

2005 Loving Leviathan: The Discourse of Whaling-watching in Australian Ecotourism. In J. Knight (ed.) *Animals in Person: Cultural Perspectives on Human-Animal Intimacy*, pp. 191-210. Oxford: Berg.

2010 Speaking of Whales: From Totemizing the Humpback to Demonizing the Japanese. In J. E. Ringstad (ed.) *Whaling and History III* (Pubkasjon nr. 33) Sandefjord: Kommander Chr. Christensens Hvalfangstmuseum.

ブルールクス, J.-P.

2010 「バスクにおける捕鯨の歴史」山浦清訳『貝塚』66: 19-34。

Reeves, R. R. and T. D. Smith

2003 *A Taxonomy of World Whaling: Operations, Eras, and Data Sources* (Northeast Fisheries Science Center Reference Document 03-12). Woods Hole, Massachusetts: U. S. Department of Commerce.

Savelle, J. M.

2010 Cumulative Bowhead Whale (*Balaena mysticetus*) Harvest Estimates by Prehistoric Thule Inuit in the Canadian Arctic 1200-1500 A.D.: Implications for Bowhead Whale Population Modeling and Thule Demography. *Bulletin of National Museum of Ethnology* 34(3): 593-618.

Savelle, J. M. and N. Kishigami

2013 Anthropological Research on Whaling: Prehistoric, Historic and Current Contexts. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 1-48. Osaka: National Museum of Ethnology.

Savelle, J. M. and A. Vадnais

2011 Releasing the Soul: Zooarchaeological Evidence for a Whale Cult among the Prehistoric Thule Inuit in Canada. *Bulletin of National Museum of Ethnology* 36(1): 93-112.

Senigaglia, V. et al.

2016 Meta-analyses of Whale-watching Impacts Studies: Comparisons of Cetacean Responses to Disturbance. *Marine Ecology Progress Series* 542: 251-263.

Singleton, B. E. and R. Fielding

2017 Inclusive Hunting: Examining Faroese Whaling Using the Theory of Socio-Cultural Viability. *Maritime Studies* 16: 1-19. (doi: 10.1186/s40152-017-00061-9)

- Sullivan, R.
 2000 *A Whale Hunt: How a Native American Village Did What No One Thought It Could*. New York: A Touchstone Book.
- Sullivan, F. A. and L. G. Torress
 2018 Assessment of Vessel Disturbance to Gray Whales to Inform Sustainable Ecotourism. *The Journal of Wildlife Management* 82(5): 896-905.
- 高橋美野梨
 2016 「国際捕鯨委員会と先住民生存捕鯨」小澤実・中丸禎子・高橋美野梨編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章』pp. 172-177, 東京：明石書店。
 2018 「捕鯨 水産資源の利用と保護」佐藤史郎・川名晋史・上野友也・齊藤孝祐編『日本外交の論点』pp. 273-282, 京都：法律文化社。
- 丹野大・濱崎俊秀
 2012 「日本人の鯨食観—2008年首都圏データ（560人）は語る」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 225-244, 東京：成山堂。
- Tanno D. and T. Hamazaki
 2013 How the Japanese Appetite for Whale-related Foods Is Rooted in Their Culture: Findings Revealed from the Data (N-560) of the Tokyo Metropolitan Area in 2008. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 251-265. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Tejsner, P.
 2014 Quota Disputes and Subsistence Whaling in Qeqertarsuaq, Greenland. *Polar Record* 50(4): 430-439.
- 山浦清
 2012 「考古学から見た日本列島における地域捕鯨の歴史と現状」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 137-153, 東京：成山堂。
- 山下澄登
 2004 『捕鯨I・II』（ものと人の文化史120）東京：法政大学出版局。
- 渡部裕
 2012 「カムチャツカ半島沿岸先住民のシロイルカ猟について—北東アジアにおけるその位置づけ」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 122-136, 東京：成山堂。
- Watanabe, Y.
 2013 Beluga Hunting Practices of the Indigenous People in Kamchatka: Characterization of Sea Mammal Hunting in Northeastern Asia. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 177-194. Osaka: National Museum of Ethnology.
- WDC (Whale and Dolphin Conservation)
 2013 *Whale Watching: More Than Meets The Eyes: A Special Report from WDC*. Plymouth, MA: Whale and Dolphin Conservation.